

消火栓1基も使えない

「応援が来れば、火は消せる」――。

長田の火災現場に駆け付けた消防署員が、ぼう然としていたところ、神戸市役所三号館の市消防局管制室で、七十インチのスクリーンに映し出される惨状を見ていた警防課警防係長の片岡隆夫(五二)は「せめて二倍の人員(市消防職員千三百八十

三人)が必要だ」と焦っていた。緊急時は、相互応援協定(消防組織法二一条)を結ぶ近隣市町、県内全域の消防に市消防局長がすぐに応援依頼できる。だが、明石、三木など近隣市との電話は一向につながらない。

片岡は消防局長上川庄二郎(五二)に「県

内だけでは無理。全国の応援がいります」と訴えた。広域派遣には消防組織法二四条の三の一項により、県知事から消防厅长官への要請が必要だ。

その実務を担当する兵庫県消防交通安全課では、防災係長の野口一行(四四)らが住民からの電話応対に追われ、消防庁に連絡が取れない。

逆に消防庁は、猛煙が上がる神戸の現場のテレビ中継に衝撃を受け、独自の判断で全国自治体に出動準備のサインを出すとともに、県に連絡してきた。

大阪、京都、横浜、名古屋、千葉、川崎各市、東京都、岐阜、埼玉三都県の九自治体の消防、防災ヘリが救助隊員四十三人を含む七十七人を乗せて兵庫県消防学校へ。陸路では東京消防庁や福岡市消防局など十九都府県の百四十七消防本部から、二百五十三隊、総勢千八百八十人が、ポンプ車や救助車など二百四十三台で神戸など被災現場を目指した。

近隣の三田市消防本部も「出動」を伝えてきた。片岡は「すぐ、長田へ」と叫んだ。

そのころ、神戸市の上水の七四%を供給する阪神水道企業団の「甲東」「西宮」両ポンプ場は停電。四百六十一千五百キロ・ワットの電力が必要な十二台の送水ポンプのモーターが停止、六甲山系を縫う総延長六十キロの上水トンネル二本へ

の送水が不能となっていた。

震度5を想定した水道配管網(総延長四千キロ・メートル)は、五万七千五百二十七か所ですでにずた。各所で水漏れが起こり、三十時間分の備蓄がある百十九か所の配水池は、ほとんど、底をついていた。

しかも、本来、こうした事態に素早く対応するはずの市水道局のある市役所二号館六階がこともあろうに地震で押しつぶされ、中枢機能を失っていた。

配水池を統括する兵庫区の奥平野浄水管理事務所の管理センター四階制御室では、「キンコン」とコンピューターの警報音が鳴り響いた。壁に設置したデジタル式の警報表示盤に電光文字がついた。「板宿低層 下限否」。長田区南部三万七千戸の給水をカバーしている板宿低層配水池が最低水位を割ったことを示した。

主幹の平林龍彦(五二)ら五人が、窓の外を眺めた。南西三キロの長田区で天高く幾筋もの煙が上がっている。「配水池に送水せねば、消防車が到着しても、消火栓が使えない」

長田区には、消火栓千三百十二基があった。このすべてが板宿低層配水池の七千トンの水が無くなったため、一基も使えない。防火水槽も九十三基のうち二十六基が壊れ、十基が倒壊家屋にふさがれたままだ。

全国からの消防隊は、水が使えない神戸の火災現場へ急いでいた。そして、恐ろしいことに長田区が見放されたのは「水」だけではなかった。

火災は長田区(神戸港沖)を震源とし、55件の火災が発生。火災は長田区(神戸港沖)を震源とし、55件の火災が発生。火災は長田区(神戸港沖)を震源とし、55件の火災が発生。

燃える神戸市街地

